

新川（千葉県）

細野 玲

私にとって身近な川といえば、出身地である千葉県八千代市を縦断している新川である。自宅から徒歩10分程度で行ける距離にあるため、良い遊び場所の一つであったからだ。新川周辺はグラウンドがひとつある以外には特に整備された公園があるわけではなく、水田が広がり、ちょっとした森もあるなど、割と自然豊かであり、幼少期には蛙やトンボ、ザリガニといった生き物を取りに友人たちとよく訪れていた。また、ボーイスカウトに属していた私はその活動の中で、簡易的な水質調査を行ったこともある。



しかし、年齢とともに川と接することもなくなり、特にその存在を意識することもなくなっていた。

今回のレポートを通じて改めて新川を訪れてみると、かつてみた風景とほぼ同じ風景が広がっていた。もちろん遠目に見える建物は増えてはいたが、ススキなどの植物、雑草が生い茂りその後ろに水田や畑が広がる周辺は変化していなかったのである。

ちょうど自分の生まれた20年前から八千代市に住んでいる両親に尋ねても、一部道路の整備が進んだ点や、橋、鉄道の高架橋が1つずつ増えた以外に大きな変化はなく、川自体には、やはり変化はなかったようだ。その理由の一つと考えられることを私は近くにある記念碑に見つけることができた。新川というのは印旛沼の治水のために享保9年に幕府の命により建設された堀が起源の川、つまり人口の川、一種の水路なのだそう。元が人口の川であるがゆえ、近代に護岸されて以降、他の一部の河川のように自然本来の姿に戻そうというような動きも起こらないし、その水を農業用水として長く利用してきた田畑が変わらず存在し続け、周辺もあまり変化しないのだと考えられる。

新川に関するウェブページはあまり多くないが、ウィキペディアにおいて新川の歴史や概要についてより詳しく知ることができた。新川は江戸時代の利根川東遷事業によって利根川とつながった印旛沼が、利根川の水位上昇の影響を受けてたびたび洪水を起こし、農業へ甚大な被害を与え続けていたためその水位上昇を東京湾へ放流するために作られた、印旛放水路と呼ばれる水路の一部で、中間地点の用水施設を通じて自然河川である花見川へとつながっており、自然河川ではなく、土地を切り開いて作られた水路であるため、別名を印旛疎水路というのだそう。水位上昇の見られない通常時は流れが

少なく、水位も印旛沼と同じなので、独立した川というよりは印旛沼の延長、一部といった感じの存在だともいえるだろう。印旛沼につながっていることは幼少期も知っていたが、新川という名しか知らず、その名ゆえ完全に「川」として認識していた私には、疎水路、印旛沼の延長というとらえ方は新鮮なものだった。

八千代市のホームページでは新川自体の情報はなく、それにまつわる事業やイベントなどの情報が公開されていた。近年では川沿いに桜を植樹する、「千本桜植栽事業」やプレーパークの設置などが行われているようである。確かに今回訪れたときに一部の遊歩道わきにメッセージ入りのプレートの付いた桜の木が何本も植えられているのが見受けられた。また、市のものも含むその他のページには、新川の風景写真が多くみられ、市のページ内の「ふるさと百景」では複数枚の新川の写真が掲載されていた。これらのことから、新川というのは八千代市とその住民にとってはある種のシンボリック的存在であることがうかがえる。今回訪れた際にも多くの人々が川沿いの道を散歩やランニングしていたり、釣りをしていたりと人々の憩いの場となっていたうえ、地元の祭りは新川のすぐ脇が会場であり、対岸から花火が上がるなど、たとえその本来の存在意義が治水のための水路であろうと、住民にとっては愛着を持って接する重要な場所であるといえるだろう。

加えて、サギやカモ、カワウといった鳥類もみられたことから、自然環境という点でも重要な役割を担っているように感じる。なぜなら、八千代市には新川以外に特に目立った河川や沼などがいないからである。これらの水辺に生息する生き物によって形成される生態系は新川なくしては八千代市には存在し得なかったのだ。さらに、一見すると水は深い緑色で、かなり汚れて見えるこの川にこのような鳥類が来るということは、魚類も少なからず生息していることの表れであり、見た目よりも水質が良いということの証明ともとらえられる。つまり、八千代市においては新川というのはことによると唯一の水棲生物の豊かな生息地でもあるのだ。

しかし、その点に関しては一つ懸念がある。それは、釣りをしたことのある友人の話などからすると新川にはブラックバスがいるということである。この川に限らず全国的な問題であるが、外来種であるバスが繁殖しているということは、もともといた在来種の存在が危ぶまれているということになるからだ。まして、利根川とそれにつながる印旛沼の延長であるこの川では、在来種も豊富にいたであろう。その元来の生態系が破壊されつつあるとしたら大きな問題である。もし、バスが圧倒的な勢力をもつようになり、小さな魚がいなくなってしまう場合、おそらくそれらを餌としていた鳥類もいなくなってしまうのではないだろうか。特にこれといった対策は取られていないようであるが、八千代のシンボリックな川なのだからその生態系保護も行うべきであると感じる。元来の生物と人々の共存によってより一層市の中心的存在となりうると思うからである。

最後に、改めて地元の川を見直すにあたって、現在の下宿先のすぐ近くを流れる野川

との比較をしたいと思う。新川が先に述べたように人工の水路であるのに対し、野川は自然河川である。また、周辺環境も野川は野川公園、武蔵野公園の二つの公園の一部として存在しており、全体的に公園の要素をもった川である一方、新川にはそのような要素は備わっていない。このように、根本的な部分と周辺の状況ともに大きく違う二つの川ならば、その役割も当然違うように思われる。しかし、野川周辺を歩いても、新川周辺を歩いても、人々がそこに集い、散歩やジョギング、サイクリングといった運動を行ったり、川辺で休憩したりしているのは全く同じなのだ。鳥類に関して、細かな種類は違うにせよ、サギ、カモは両川にみられる。つまり、川というのはあまり深く意識していないようだが、人間にとってはどこか惹きつけられ、癒しを求める対象であるうえ、鳥類、魚類の生息地としての働きは、その発祥のいかんに関わらず同じであり、非常に重要な存在だと言えるのである。

今回、改めて川とむきあったことで、その重要性に気づき、同時にいかに今まで自分がそれを意識していなかったかが分かった。川が人間にとっては憩いの場として、生物にとっては生息地として、それぞれ魅力的な存在であるということは、結局のところ生き物というのは、生きていくのに必要不可欠な「水」にどういう形であれ惹かれていくものなのだという事のようにも思える。新川をはじめ多くの河川は何気ない存在のように感じてしまうが、実際はその地域の中心的存在であることも多いだろう。人と他の生物両方に愛される場所として存在し続ける川というものを、もっと意識的にとらえ、守っていくことが必要だと思う。

参考

“印旛放水路” ウィキペディア

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%8D%B0%E6%97%9B%E6%94%BE%E6%B0%B4%E8%B7%AF>

八千代市ホームページ <<http://www.city.yachiyo.chiba.jp/index.html>>